

第15回全国大会

(2015年11月21日(土)、於 同志社大学 今出川キャンパス 良心館)

要 旨

I 研究発表

第1会場 (105室)

1 Mariana Reimagined: Tennyson and Shakespeare in Millais's *Mariana* (1850-51)

浅野 菜緒子 (聖心女子大学 大学院)

Mariana (1850-51) by John Everett Millais (1829-96) is one of the three principal works based on Shakespeare's plays during his Pre-Raphaelite period (1848-53). Precisely, it is not directly inspired by a Shakespearean play (*Measure for Measure*) but by a Tennyson poem, 'Mariana' (1830), unlike the other two works; *Ferdinand Lured by Ariel* (1848-49) and *Ophelia* (1851-52). Yet as in the other two, Millais was faithful to the original text, in this case, of Tennyson in conceiving his version of Mariana. Simultaneously, we can observe how a distance from the original source by Shakespeare allowed the artist to experiment with his own imagination.

This study has examined various elements of the painting such as the claustrophobic room and nature around 'the moated grange' as against the landscape rendered by Tennyson's language; Mariana's practice of embroidery which echoes a particular domestic activity imposed on the Victorian women; the female sexuality which separates Millais's Mariana from a femme fatale and a virginal woman; as well as the contemporary Victorian culture related to the composition, including the culture of 'reading Shakespeare' especially for women, and the appeal of the figure of the forsaken woman. Through the whole, it has examined three different images of Mariana by Shakespeare, Tennyson, and Millais respectively. As primary sources, it has looked into Shakespeare's plays, Tennyson's poems, Millais's paintings as well as the

letters and diaries of the latter two, and also Victorian essays and reports. Furthermore, this study has aimed to seek to what extent a Shakespearean source might have influenced Millais's representation via Tennyson's. Overall, it has attempted to identify the importance of the literary sources in Pre-Raphaelite Millais.

2 エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画に見るキリスト教イメージ 久保 美枝(京都ノートルダム女子大学 研究助手)

エドワード・バーン＝ジョーンズの手がけた神話を主題とした絵画作品では、キリスト教絵画のモチーフによって絵画空間が構成されていることが、ファビアン・フレリッヒによって指摘されている。本発表では、バーン＝ジョーンズのイタリアでの絵画修行とその後の展開という絵画活動の流れに、作品《プシュケの婚礼》(*The Wedding of Psyche*, 1895年完成)を位置づけ、その作品の構図がジョットの《マリアの結婚》に倣ったものであり、またプシュケの身振りがシモーネ・マルティニーニによる《受胎告知》のマリアの身振りへと通ずることを例証した。質疑では、婚礼のモチーフとは裏腹に、行列を成す人物たちの視線、そして色彩は、プシュケの嫁ぎ先を予感させる、喪を想起させる行列であることが指摘された。キリスト教絵画モチーフとギリシャ神話を融合させたバーン＝ジョーンズの絵画空間において、キリスト教美術の伝統的な構図に新たな意味合いを付そうとするその革新性について考察することを今後の課題としていきたい。

3 女性労働者がレディに変身する時——アーサー・マンビーの写真 におけるラファエル前派的なもの

吉本 和弘(県立広島大学)

本発表では、ロンドン在住の役人であり女性労働者を謳う詩人でもあったアーサー・マンビー(1828-1910)の写真コレクションとラファエル前派

の絵画との共通項を検証することによって、写真という新技術の出現とこの美術運動の間にどのような影響関係があったのかを考察した。

批評家ラスキンの‘Truth to Nature’という言葉に代弁される精密な細部描写というラファエル前派の特徴は写真の影響が大きいと考えられる。一方で写真術はラファエル前派のもうひとつの特徴であるナラティブ・ペインティング、つまり聖書や文学作品から題材をとる手法から影響を受け、物語性の強い演出を施した写真を撮るようになってゆく。

労働を賛美し自発的降格による魂の救済を説いたマンビーの写真の場合、汚れの細密な描写や重労働をする女性の肖像群に混じり「宿命の女」を演出したものが見受けられ、そこにはラファエル前派との共通項を見ることができる。

第2会場(106室)

1 *The Lancashire Witches* におけるペンドルの魔女裁判

田邊 久美子(関西外国語大学)

歴史小説家 William Harrison Ainsworth は、1848年に *The Sunday Times* に *The Lancashire Witches* を連載した。この連載は1612年に魔法により周囲の住民に危害を加えたとして処刑されたペンドルの魔女と魔女裁判についての実話を基にし、1849年に *The Lancashire Witches: A Romance of Pendle Forest* という題で小説として出版された。1846年から1847年にかけて Ainsworth はランカシャーにあるペンドル・ヒルを取材し、この魔女裁判の書記であった Thomas Potts が1613年に出版した *The Wonderful Discoverie of Witches in the Countie of Lancaster* の公的記述をもとに執筆しているが、小説では Ainsworth の創作による部分も多くみられる。ペンドルの魔女狩りにはプロテスタントによるカトリックの迫害という宗教的要因も絡んでいる。本発表では、この作品の中で特に ‘fancy’, ‘fantasy’ という用語が多用されている点や、当時の魔女のイメージ、および、チェサム協会の影響によりピクチャレスクな視点で風景を描写している点についても触れた。

2 手遣い人形劇「パンチ&ジュディ」について

平野 惟(神戸大学 大学院)

パンチ&ジュディ (Punch & Judy) は英国の伝統的な人形劇として知られるが、主人公パンチの登場(1662年)から彼と妻ジュディとの闘争を描く手遣い人形 (glove puppet) 劇という現在知られる形式の完成(19世紀初頭)までには、変化に満ちた150年もの発展期間がある。

本発表では「パンチ&ジュディ」の形成が19世紀半ばまでの英国民衆娯楽の衰退状況と重なっていることに着目し、発展期を通して娯楽への様々な障碍を潜り抜けてきたパンチが、この時期までにイギリス民衆の遊び心の象徴として定着し、ジュディに象徴される抑圧とせめぎ合うこの劇形式において結晶化したことを示した。そのとき「パンチ&ジュディ」とは、あくまで350年の歴史を持つ「パンチ劇」の一形態であり、その独自性は、当時の他の娯楽には一方的な圧力として働いた娯楽行動基盤の「真空」(マークムソン)という当時の状況を、むしろ完成形のエートスとして取り込んでしまっている点にあると言える。

3 第一回クリスタルパレス・コンテスト(1900年)再考——ブラスバンド運動拡大とその後のゆくえ

上宮 真紀(甲南大学 非常勤)

1900年7月21日、長引くボーア戦争への募金を目的に、ブラスバンド・コンテストがクリスタルパレスで大々的に行なわれた。このコンテストは、従来、19世紀半ば以降、労働者階級を中心とするブラスバンド運動 (brass band movement) の「全国化」を象徴するものとして強調されてきた。

しかしながら、このコンテストの様子を伝える『タイムズ』紙や『マンチェスタ・ガーディアン』紙などの新聞報道からは、これが「全国規模」の大会でなかったことは明らかである。1900年のクリスタルパレス・コンテストとは何だったのか。なぜこのような「誤解」が生じたのか。

本報告では、このコンテストの具体的な中身を当時の報道記事を中心に

検証し、その意味を問い直した。そして、そこから新たに浮かび上がる問題点を整理しながら、最後に20世紀初頭のプラスバンド運動の展開とそこに絡む「音楽と社会」というより大きな問題を考える糸口を示唆した。

II シンポジウム (101室)

神はどこにおられるのか——ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰

司会：河村 民部(近畿大学 名誉教授)

本シンポジウムは〈19世紀の宗教と信仰〉に纏わる文化史的・思想史のおよび宗教史側面からの討論であり、文学的側面からのものではない。要点は、本学会が「ヴィクトリア朝文化研究学会」と銘打つからには、ヴィクトリア朝の思想文化の重要な一翼を担っていた当時の宗教事情、神と信仰の問題を避けて通ることはできないというわけで、これまでにこの分野の纏った討論がなされてこなかったという弱点を補うことにある。パネリストは纏め役の有江大介氏をはじめ、松本哲人氏、小田川大典氏のお三方で、松本氏は「J. プリーストリーと T. H. ハクスリー——18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人」、有江氏は「J. S. ミルのイエスと J. H. ニューマンの神」、そして小田川氏は「ヴィクトリア朝「教養」論の宗教的背景——ユニテリアニズムとリベラル・アングリカニズムを中心に」という題目のもとに、各人の蘊蓄の一端を披露して頂いた。

J. S. ミルのイエスと J. H. ニューマンの神

パネリスト：有江 大介(横浜国立大学 名誉教授)

ミルとニューマンはヴィクトリア時代の宗教と科学との相克の中で、信仰と神の存在について真摯に考えた。

合理主義の旗手ミルは、遺作『宗教三論』の第2部迄で、啓示抜き世俗的道德教たる、人間イエスを理想像とする「人類教」を提示した。しかし、

第3部「有神論」において、肉体と靈魂の不滅を蓋然性として容認する“希望の宗教”を表明した。これはミルの支持者だけでなく正統信仰を持つミルの反対者をも驚愕させた。

イングランド国教会に対する信仰復興運動であったオクスフォード運動の指導者ニューマンは、科学的認識の意義を承認しつつその上で、バトラーに倣った蓋然性を媒介にした推断的感觉による神に向かう信仰への“飛躍”を試みた。この過程でニューマンは国教会からカトリックへと改宗し、当時の知識人社会に大激震をもたらした。

これらは神の名において日々殺戮が行われる現代に、“信仰”の意義について再考するための素材を提供している。

J. プリーストリーと T. H. ハクスリー——18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人

パネリスト：松本 哲人(徳島文理大学)

本報告の目的は、ヴィクトリア期を代表する科学者であるトマス・ヘンリー・ハクスリー(Thomas Henry Huxley, 1825-1895)の伝記的著作の中で、比較的的成功している論説と評価されているジョゼフ・プリーストリー(Joseph Priestley, 1733-1804)に関する論文「ジョゼフ・プリーストリー」(“Joseph Priestley”, 1874)を分析することである。ハクスリーの本論文は、1874年8月2日、バーミンガム市に寄贈されたプリーストリーの銅像の除幕式典のときに行った記念講演にハクスリー自身が加筆、修正を施し出版したものである。本論文において、ハクスリーは、18世紀後期イングランド啓蒙運動が目指した「自由」から強く影響を受けていたことが見受けられる。本報告ではその中でも特にハクスリーが学問の自由を主張するとき、プリーストリーを高く評価し、彼の考えに傾倒していたことを明らかにした。

ヴィクトリア朝「教養」論の宗教的背景——ユニテリアニズムとリベラル・アングリカニズムを中心に

パネリスト：小田川 大典(岡山大学)

S・コリーニによれば「節制、自助、儉約、勤勉、義務、自律といったヴィクトリア期の中産階級の一般的な徳目」の根底には「意志の力によって、官能的すなわち動物的な衝動と情念を克服する能力」を過度に強調する「ヴィクトリア朝道徳の自覚されざるカント主義」としての「品性」(character)のエートスが存在し、J・S・ミルやM・アーノルドの「教養」(culture)論は、まさにそうした厳格なピューリタンの「品性」のエートスに対する批判をその眼目としていた。本報告では、コリーニの指摘を踏まえながら、ミルの教養論が、三位一体と原罪を否定し、善人イエスを模範とした人間の完成可能性を唱えるユニテリアニズムを背景としていたこと、そしてアーノルドの教養論が、父トマスから継承したりベラル・アングリカニズムの影響下で形成されたことに着目し、ヴィクトリア朝の教養論の宗教的な背景の一端を明らかにすることを試みた。

III ラウンドテーブル

第1会場(105室)

大阪・神戸とヴィクトリア朝英国——産業と文化の観点から

開市後の大阪とヴィクトリアン・マンチェスター

司会・提題者：松村 昌家(大手前大学 名誉教授)

1914年に大阪紡が東洋紡になってから大阪は東洋のマンチェスターであることを誇るようになった。東洋のマンチェスターを実現させるのに功績があったのが、渋沢栄一と山辺丈夫であったことは夙に知られている。しかしマンチェスターの産業を代表する紡績業そのものが、マンチェスターから大阪へ直接に輸入されたのではなかった。日本最初の紡績業は鹿児島に始まり鹿児島から大阪へ伝わったのである。そこで1862年のロンドン

万博へ目を向ける必要がある。その機械展示場には新型の紡績機が展示されていて、時を合わせてロンドンを訪れていた幕末使節団の眼を奪った。それから5年後には、鹿児島磯の浜に日本最初の紡績工場が出現したのだ。紛れもなく鹿児島藩代表として使節団に加わっていた寺島宗則の先見の明によるものであった。

本ラウンドテーブルに関して特記しておきたいのは、外部の同好の士を招いての最初の試みであったことである。1868年に開市・開港を経た大阪と神戸は、東京・横浜と同様に文化・文明のあらゆる面でヴィクトリア朝英国と密接な関係をもつ。それぞれの立場でどのような領域をどのように開拓しているのかを語り合いたいと思った。司会者が不慣れで十分に役を果たし得なかったが、横浜にも一度踏みこんでみたい気がする。

神戸外国人居留地とヴィクトリア朝文化の影

提題者：濱下 昌宏(神戸女学院大学 名誉教授)

ヴィクトリア時代(1837-1901)と、神戸外国人居留地時代(1868-99)とは歴史的に重なる。経済活動を通じての国際化、あるいは植民地主義そして帝国主義という英国の栄華は神戸にも反映され、英国人は在日外交団のリーダー格であり、神戸における英国人居住者数は際立って多かった。英国はすでに東インド会社から新興の商社への継承によって英国—インド—中国という三角貿易を成功裏に展開していたが、その取引の闇の部分とはいうまでもなくアヘンの密売・専売であり、それによって富を増大させたサッスーンやジャーディン・マセソン等の商会は、その富の安全かつ迅速な本国送金のために設立されたチャータード銀行(1853年)や香港上海銀行(1865年)と並んで、当然のように神戸にも進出してきた。国際的近代都市の体裁を整えての神戸の発展はめざましかったが、しかし一方で、1894年より2年間ほど神戸滞在をしたラフカディオ・ハーンは居留地の欧米人の生活ぶりに嫌悪感を示している。それは、無批判に西洋文明を吸収しようとする近代日本人への警鐘でもあったであろう。

神戸外国人居留地とヴィクトリア朝文化

提題者：石戸 信也(兵庫県立西宮高等学校・神戸大学 大学院)

開港150年を目前にした近代港都である神戸の文化形成や市民生活の上で、大英帝国のヴィクトリア朝文化の果たした役割は大きい。居留地126区画中65区画と最多を取得し、明治20年代に欧米人中のイギリス人の比率が横浜より高かった神戸であるからこそ、都市インフラ、建築、スポーツ、鉄道、教育、洋服、食生活、キリスト教、ホテル、新聞、ガラス器製造などあらゆる分野でその影響や交流が見られたのは言うまでもない。

今回は特に古写真、絵葉書、錦絵、挿絵、引札、地図周縁図などで「名所」として表現、視覚化された神戸外国人居留地を約5千点の石戸コレクションから抽出して見ながら、たとえば棟梁たちによる擬洋風建築の伝播の調査例などをあげ、その文化史的意義を提示した。ヴィクトリア朝文化の受容と変容の理解は、表層的な「大英帝国の光と影」イメージでの把握を脱して、その具体的な深層に迫ることによってこそ可能であると考えている。

第2会場(106室)

ヴィクトリア朝文学と宝塚歌劇

——ダンディズム・植民地・スペクタクル

司会：玉井 史絵(同志社大学)

宝塚歌劇は人によって好き嫌いが二分される。人生の一部と言ってもいいくらいに情熱を傾ける人もいる一方で、見たくもないという人がいる。今回のラウンドテーブルでは前者の熱烈な宝塚ファンである二人の研究者が、宝塚歌劇とヴィクトリア朝文学の関連性を「熱く」論じた。司会を務めた私は好き嫌い以前に、宝塚にはほとんど無関心であったが、宝塚基礎知識から始めてくれたお蔭で、その豊かな世界の一端を知るよい機会となった。このラウンドテーブルを通して見えてきたのは、宝塚だけではなく、日本から見たヴィクトリア朝という時代である。日本人はヴィクトリア朝をど

のように解釈し受容したのか、何を「ヴィクトリア朝的」であると感じ自らの創出したハイブリッド的芸術のなかに取り込んでいったのか——こうしたさまざまな問いかけが生まれる刺激的な議論が展開された。今後のさらなる発展を十分に期待させる実り多い企画であったと思う。

提題者：西垣 佐理(近畿大学)

本発表で目指したのは、女性だけの劇団である宝塚歌劇という日本独自の演劇形態でヴィクトリアニズムがいかに消化されているかを分析することだった。実際に上演されたヴィクトリア朝文学、特にディケンズの『二都物語』、『大いなる遺産』、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』と宝塚版を比較し、原作と宝塚男役の美学に通底する「ダンディズム」や、その他帝国主義的植民地をテーマにした作品、そしてヴァンパイアや精霊などといったヴィクトリア朝的要素が宝塚作品でいかに用いられ、スペクタクル化されてきたかについて論じた。現在でも、宝塚歌劇では原作を用いるか否かにかかわらず、ヴィクトリア朝的要素は随所に取り入れられていることも指摘した。その意味で、宝塚歌劇や日本で行われている演劇等に関してヴィクトリア朝文学・文化の側面から分析することは、今後の学際的研究において十分有効なアプローチとなり得るとわかったのは大きな収穫であった。

提題者：桐山 恵子(和歌山大学)

学会という名のもとでラウンドテーブルを行う機会を頂いたので、宝塚ファンの井戸端会議に陥ることなく、さらに歌劇を下手物趣味とする視点を避けることに留意し、舞台作品におけるヴィクトリア朝文学の特徴的な要素を考察することを目指した。とはいうものの、ディケンズやワイルドの小説を翻案した宝塚作品を扱った前半では、ファン心理やファンクラブの実態についての質問も頂いた。その際、阪急電車に乗れば公演ポスター

を目にする関西在住者と、そのような条件下にはない関東在住者との宝塚への距離感の違いが判明し、興味深かった。後半では、大英帝国の植民地をめぐる作品における主人公のアイデンティティーの問題が提起されたり、ヴィクトリア朝文学に登場する妖精やヴァンパイアは、宝塚で舞台化しやすい存在であることが確認されたりした。また昨今、宝塚でも海外ミュージカルの上演回数が増え、文学の翻案作品が少なくなっていることは、宝塚を超えた文学離れを象徴しているのかもしれないという意見が出された。

IV 特別講演 (101室)

「希望の巡礼」——ウィリアム・モリスの1880年代

川端 康雄 (日本女子大学)

1880年代のウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) は一方で草創期のイギリスの社会主義運動を牽引し、他方、本業のモリス商会ではテキスタイル部門を主としたデザイン制作で目覚ましい成果を上げた。後者の仕事は1880年代後半に本格化するアーツ・アンド・クラフツ運動の源泉となる。この時期にイギリスで展開された政治と芸術の前衛運動の両面で彼は決定的に重要な役割を果たした。

本講演では1880年代におけるこれらのモリスの活動とその意義を検討するための手がかりとして、『希望の巡礼』(*The Pilgrims of Hope*)を取り上げた。これはモリスが設立に関わった社会主義同盟の機関紙『コモンウィール』(*The Commonwealth*)に1885年から翌年にかけて随時連載された。1871年のパリ・コミューンに参加したイギリス人青年の愛と戦いを描いたこの物語詩は従来さほど注目されてこなかったが、そこには自伝的な要素も含む闘士の苦悩や希いが田園と都市を舞台に語られていて興味深い。これを頼りに、130年前のモリス自身の希望の中身をそのコンテキストとともに浮かび上がらせることを図った。